

新しい文化芸術施設整備に向けたシンポジウム 文化芸術によるまちづくり ～みんなでまちを変える～ 実施報告

I 実施概要

1 趣旨

岡山市では、岡山市民会館・岡山市立市民文化ホールに代わる新しい文化芸術施設の整備を進めています。本年6月には施設の方向性を定める「新しい文化芸術施設の整備に関する基本計画～集い、魅せる、つくる 躍動するまちを目指して～」を策定しました。

「新しい文化芸術施設」の開館に向けて、期待される事業や活動、そして運営を考えるシンポジウムを開催。

2 日時 平成28年11月26日（土）14時～16時（開場13時30分）

3 場所 西川アイプラザ多目的ホール

4 来場者 50名

5 次第

(1) 開会挨拶

岡山市長 大森 雅夫

(2) 基調対談

津村 卓（聞き手：草加 叔也）

(3) パネルディスカッション

パネリスト

■津村 卓

上田市交流文化芸術センター館長・一般財団法人地域創造プロデューサー

■五島 朋子

鳥取大学地域学部附属芸術文化センター教授

■長谷川 誠

岡山市表町商店街連盟理事長

■大森 雅夫

岡山市長

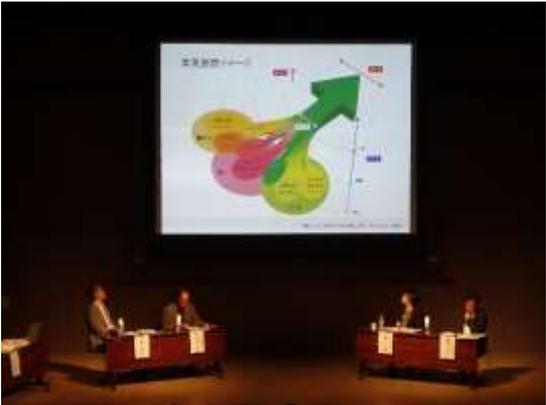
進行：草加 叔也（(有)空間創造研究所 代表）

II 基調対談（津村氏）

- 北九州芸術劇場は、NHK 北九州放送局、朝日新聞社西部本社、ショッピングモールなどからなる複合商業施設・リバーウォーク北九州の中に整備されている。他の商業施設と共用である搬入動線の確保、3つの劇場間のセキュリティの確保など複合施設ならではの課題がある。3つの劇場の入口は一つのフロアーに集められているが、公演のない時には人は来ていない状況。公益財団法人北九州市芸術文化振興財団が指定管理者として運営しており、職員数は70名。
- 上田市交流文化芸術センターは、直営で運営しており職員数は31名。専門人材を市職員として登用している。当初は12名が提示されていた。交流がキーワードの施設で、交流プロムナードでは高校生が勉強している光景がみられる。彼らの居場所を確保してあげることが次の世代につなげる意味でも必要と考えている。
- これからの劇場、ホール施設では、人をどう集めるのが課題。早期にどのような劇場、ホールにするかを決めて、人を決めていかないとすべてが手遅れになる。

III パネルディスカッション（津村氏、五島氏、長谷川氏、大森市長）

【事業展開について】

- 基本計画の検討に際し、岡山市民の文化活動が盛んであるとわかった。“今ここにいない人たち”にどれだけ想像力を働かせることができるかが新しい文化芸術施設の大きな役割、意義ではないかと考えている。“つくる”ということをイマジネーションとクリエイティビティの両方をもってやっていくことが新しい文化芸術施設に必要な事業や役割ではないか。（五島）
- 7つの事業のうち、“つくる”に重点を置けるか。作品をつくると劇場運営全てのことがわかり、劇場のホスピタリティにつながり、公演したい劇場として選ばれるようになる。（津村）

- まちや市民とどう一緒になって取り組んでいけるかは重要だが、時間がかかる。開館前の期間に何をするか、どれだけ準備できるかが重要。(津村)
- 中心市街地の活性化と回遊性の向上そして新しい文化拠点の設置のため、かつて賑わった千日前地区への移転が決定した計画。すでにシンフォニーホールと千日前を結ぶオランダ通りを見直し、改めて日本初の女医と言われている「オランダおいね」を顕彰しようとするイベント「オランダおイネ花まつり」は2年にわたり開催されている。南に“ハコ”が出来る事により、点から線に、そして面に広がり「まちづくり」につながればと思う。(長谷川)
- 岡山市では文化活動が盛んになっている。地域の中核的都市は周辺にも責任を持つべきで、広がりを持って、つくる・集う、そしてそれを見る・楽しむを考えていくべきではないかと思う。倉敷市との関係については、いい協調であり競争相手で、そうしてお互いが伸びていくと思う。施設の役割分担が重要ではないか。また、施設とまちの信頼関係は、これから6年あるので、いろいろな具体例を専門家に教えてもらいながら、市民と語り合っていきたい。(市長)
- 文化庁が、優れた劇場に対し助成を出す「特別支援事業」という枠組みがあり、その助成を受けている劇場・音楽堂等は15施設あるが、中四国には1カ所もなく、兵庫から西は北九州のみである。地の利や環境の良い岡山市で、基本計画にあるような素晴らしい劇場ができれば、岡山市だけでなく中四国、全国に大きな波及効果がある。(五島)
- 特別支援事業を受けている施設は、兵庫から西は北九州芸術劇場だけなので、岡山市なら特別支援を狙うチャンスが十分あるし、みんな期待している。(津村)



【組織・人材について】

- まちとの信頼関係をつくることや中核都市として50年後を見越した事業をするには、事業の責任者が必要になる。また、公共施設として、劇場の専門人材だけでなく、地域をよく知り、つなげる役割のコーディネーターが必要。(五島)
- どういうミッションをもって、どういう劇場にしたいかが決まらなと、プロデューサーがいるのか、芸術監督がいるのか決まらなと、基本計画のコンセプトでいくなとプロデューサーは必要だと思ふ。ただ、岡山市が世界に対して作品



を発信していくことを目指すなら、芸術監督は置くべき。芸術監督制でも番頭役としてプロデューサーは必要なので、しっかりしたプロデューサーを入れられるかどうか重要。(津村)

- 県の施設であるが、ルネスホールは他にはない成功事例。シンフォニーホールと役割分担し事業を行うのに芸術監督、プロデューサーは必ず必要。(長谷川)
- ミッションをどう定義していくかだが、貸館だけでなく、“魅せる”だけでなく“つくる”を意思決定した。組織として受け止める。開館までの6年間でじっくり考えながらやっていきたい。(市長)
- ある民間調査では、昨年からの1年間で、岡山市の情報接触度は42位、魅力度は49位上がっている。ただ全国約1,800の市町村の中で100位ほどの位置なので、やればもっと高まると思う。
(市長)

【劇場、ホールが果たす役割・期待】

- 当初、北九州芸術劇場のある小倉のまちの人々は下を向いている印象で、顔を3度あげたいと思った。10数年かけて、明るくなったと思う。公演に来る役者が「観客が育っている」と言ってくれる。当初蜷川幸雄さんの作品は1公演だったのが、今では5回公演が即売になっている。(津村)
- 上田は、開館から2年経ってないので、楽しみだしたという感じ。開館前からかなり準備していたので、開館してすぐにまちと楽しめているのではないかと思う。まちの人たちが結構施設を利用してきているのかなと期待している。
(津村)
- 劇場は地域の記憶を継承することと、感動を共有し喚起する役割を持っている。公共財なので伝えていくことが必要と考えている。(津村)
- 北九州芸術劇場が九州の演劇界に与えた影響は大きい。若い演劇人が福岡から北九州に流入し、ネットワークでいろいろな劇場のスタッフが育ちあっている。人材が地域の課題を解決するように育っていくという波及効果がある。(五島)
- 今、“教育”と“文化的活動”が地域への定住・移住先選定のポイントになっているが、鳥の劇場(鳥取)の活動は、その役割を果たしている。(五島)
- マンション等が建設されれば、即完売というようにまちなかへ住もうという流れが、起こっている。表町商店街では、川崎医科大学総合医療センターの開院もあり「安心・安全なまちづくり」を目指している。岡山市では、コンサートやライブなど音楽公演が盛んに開催され、文化活動も盛んで、安心して楽しく住みやすいまち。(長谷川)
- 楽しむをみんなに感じてほしい。課題もあるが、専門家と話し、これから文化を楽しむ人、市民との会話を通じてよいものをつくりたい。(市長)

■パネリストプロフィール

津村 卓（つむら たかし）

大阪府生まれ。上田市交流文化芸術センター館長・一般財団法人地域創造プロデューサー・北九州芸術劇場顧問。大阪ガスの扇町ミュージアムスクエアを企画し、副支配人兼プロデューサーに就任。その後伊丹市立演劇ホール（アイホール）チーフプロデューサー、びわ湖ホール演劇プロデューサー、長崎市文化アドバイザー、彩の国さいたま芸術劇場評議委員などを務め、北九州芸術劇場ではプロデューサーを経て館長を務める。岡山市「新しい文化芸術施設の整備に関する基本計画検討懇談会」委員。

五島 朋子（ごとう ともこ）

長崎県生まれ。鳥取大学地域学部附属芸術文化センター教授。九州大学大学院修士課程工学研究科建築学専攻修了。専門は、アートマネジメント。老朽化した市民会館の活性化事業や、劇団制作などに携わった経験を踏まえ、現在は、地域における劇場の役割の多様性、社会的な課題に積極的に取り組む劇場や演劇活動についての調査研究を行っている。岡山市「新しい文化芸術施設の整備に関する基本計画検討懇談会」座長。

長谷川 誠（はせがわ まこと）

岡山県生まれ。岡山市表町商店街連盟副理事長を経て、平成 27 年 11 月に理事長に就任。（有）長谷川楽器店代表取締役。その他、新西大寺町商店街（協）理事長、岡山市商店会連合会会長などを務めるかたわら、おかやま国際音楽祭実行委員会副委員長として岡山市の文化行政にも携わる。